

## 広義の音楽療法での〈振動〉とヨハネ「福音書」での〈共鳴〉

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成14年11月5日受理)

Die Schwingungen bei den Musiktherapien im weiteren Sinne  
Und die Resonanz beim Joh. „Evangelium“

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,  
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge  
Kuraschiki, 701-0193, Japan  
(Received on November 5, 2002)*

### 概 要

広義の音楽療法家のもとには、音楽、音声、音響を通じて、病んだ部分に正常な周波数の振動を回復することが治癒することである、という理論がある。ヨハネ「福音書」にあっては、イエスの声にいま共鳴・共振している者はすでに救われているのである。キーワード：ヨハネ「福音書」、音楽療法、共鳴・共振

### Resümee

Bei einigen Musiktherapeuten im weiteren Sinne finden wir eine Theorie: Von einer Krankheit zu genesen sei, den kranken Teilen die Schwingungen normaler Frequenzzahl wiederzubekommen.

Beim Joh. „Evangelium“ ist derjenige schon gerettet worden, der jetzt mit den Stimmen Jesu resoniert. **Stichwörter:** Joh. „Evangelium“, Musiktherapie, Resonanz

### はじめに

親鸞の『教行信證』冒頭に似て、ヨハネ「福音書」第一章後半は「復活のイエスにわれらいま遭うことを得たり」の慶びの光に満ちあふれている。この異様なテキスト空間には慶びの直接体験のエネルギーが、ことばとことばの交流（初代の弟子たちと洗礼者とイエスの口に入れられたそれ）よりも、（分節されたことばへと昇華される以前の）視線と視線の交錯の次元で、張り詰めている。

ここに出現しているような直接体験に真に根差した語りから離れてしまい、知性化した既成のキリスト論・救済論を解体すること、これがヨハネ「福音書」の

テキスト戦略であると筆者は考えている。この「福音書」がそのために採用する戦術は、先行する既成のテキスト（あるいは無意識に根を張った常識の言辞）をなぞりつつ包摂して、もともとの意味を変えてしまうという、デフォルメないしフーガの技法である。〈軒を借りて母屋を乗っ取る〉グノーシス的技法が、息を呑むほど秀抜に展開されている（アイロニカルなレトリックの破壊力）。

このレトリックの闘いはプロローグですでに苛烈に開始している。ヨハネ共同体はここで自らの直接体験を掲げて、〈イエスを信じていると思っている運動体〉内部の既成秩序に攻撃を仕掛ける。

太初に神と共にあった「言」=ロゴスが地上へ降下来臨したのだと告げるいわゆる「ロゴス賛歌」。ギリシア語のロゴスには、〈ヴェルヴムとしてのロゴス〉（言葉、ミュトス）と〈ラチオとしてのロゴス〉（宇宙的理法・秩序）のフレームがあるが、「ロゴス賛歌」のロゴスは明らかに前者である。受肉した言がその生成の直接性において既成のラチオを解体することこそが焦点だからである（「ことば」を表意するヘブライ語は〈グヴァール〉であり、この語彙は「出来事」、「押し出す力」は含意しても「秩序」を含みはしない。解体の向こうの「秩序」はまた別の問題である）。しかし普通は人々はそう理解しない。「言葉」といえば直ちにその「一義性、規範性、論理性」の幻想に目を奪われ、〈ラチオとしてのロゴス〉の地平へヴェルヴムは吸収されてしまうのである。

経験の直接性から発したヴェルヴムであっても、これは容易にラチオの既成態に解体包摂されるものである。この過酷な事実をアイロニカルに描写しているのは、12章のイエスとマルタの対話である。あの場面でマルタの言語活動は、〈現在終末論の直接性から発するイエスのヴェルヴム〉を噛み砕き敷衍することによって、〈未来終末論としてのラチオ〉の内へと咀嚼吸収してしまっているのである。

ヨハネテキストは既成のラチオと対決するための出撃拠点を、〈ヴェルヴム〉の更に下層の〈ヴォックス〉（声・フォーネー）におく。そのことは「語る」を表意する二種の動詞レゴとラレオーの使用法の歴然たる相違として出現している。レゴは物事を秩序立て論理的に語ることを表意し、ラレオーは語られる内容よりもむしろその〈声の響き〉を伝える。動物や悪霊が訳の分からないことを言うのにもラレオーが使用される。ヨハネ「福音書」ではレゴ（その名詞形がロゴス）は神学の根幹に触れる使用場面では「アメン・アメン・レゴ・ヒューミン（まことに誠に汝らに告ぐ）」がワンパターンで形式的に使われるだけなのに引き替え、「イエスが救いへ通じる真理を相手に／読者に理解させるために何かを語られる」とき、その「語る」は常にラレオーである。しかもさらに重要なことは、何かを「イエスがラレオーされる」その何か、つまり語りの内容はテキスト表面から可能な限り削ぎ落とされ、ただ「イエスから声が発せられたということ」だけが告げられる傾向が強いという点である（意味は相手が／読者が構築する以外にない——認知言語学を領導する代表のひとりであるフォコニエはすでに、「テキストの意味は読者がこれを構築するのであって、作者は方向を指示することができるのみである」と述べている）。ヨハネテキストが「ヴェルヴムによる伝達」をこのように極度に抑制するのも、上で見たように、ヴォックスが昇華され象徴化されてヴェルヴムの水準へと上昇すれば、既成ラチオとの形勢不利な空中戦が余儀なくされるという理由もあるのだ。

イエスの語りの〈内容〉より〈声の響き〉そのものがイエスの救済の質を持ちその力を発揮するとみなされているからこそ、ラレオーが重視されているといえよう。こうしたラレオーの使用法の頂点は——旧約の神がモーセに対しみずからを「在りて在る者ホ・オーン」と名乗られたのに似て——イエスが自分のことを「君に

語り掛けている者ホ・ラローン・メタ・スー 9,37/ホ・ラローン・ソイ 4,26」と名乗られた場面である（ラローンはラレオーの現在分詞）。現臨する神に遭遇することは救済の極致であろう。ここでは聴くことが同時に見ることであり、さらに触れ合うこと、知ることである。この「福音書」本体のフィナーレを飾るトマス物語の最後には、最高の直接体験が白熱して出現している。その様を小論一章の中で、目撃することにしよう。一章で筆者は、ヨハネ「福音書」の音声重視の諸事例の概要を紹介する予定である。

小論一章を通覧されれば読者は、ヨハネ「福音書」にあつて「ヴォックスの救済力」ともいうべきものがその神学の根幹にあると主張する筆者の主張の論旨を了解されることだろう。しかし、多くの「聖書学者」は「この福音書でヴォックスが救済力を持つとされていることを情感と主観性をまじえずに学問的に論証せよ」と要求する。このような知性化的客観主義的な既成のラチオからの批判を浴びるとき、筆者にはヨハネの言語活動における苦闘が共感をもって迫ってくる。このこともまた、賢明な読者が推察されることだろうと思う（「声」の救済性の解明は、声を〈息〉として掴む視点を決して喪ってはならないが、いまはこれは扱わない）。

以上のような応酬が続く中で筆者は、ミッチェル・ゲイナーの『音はなぜ癒やすのか 響きあう からだ、いのち、たましい』（上野圭一・菅原はるみ共訳）発行：無名社 発売：マクミランランゲージハウス 2000（原著 Sounds of Healing 1999）に遭遇したのである。この著作を介して導かれた広義の音楽療法の世界で、筆者が現在もっとも注目しているのは、ミッチェル・ゲイナーのメソッドの他には、アルフレッド・トマティス、ヘレン・ボニーである。フランスの怪物医師アルフレッド・トマティスの耳の理論と「モーツアルト効果」の論は、瀬戸口烈司氏の理論（小島郁生編『恐竜学』東京大学出版会 1993 第五章、『NHK 人間大学』1996年7月～9月期「人間のルーツを探る」：要するに氏は、哺乳類が恐竜によって夜行性に追いやられたお陰で、時間経過の認知に頼らざるをえない闇の中で彼らが生き残るために、耳という器官が、聴取機能、因果順序の学習機能、運動機能、姿勢保持機能とを統合するものとして形成されたと述べ、こうした統合機能を行う耳という器官が哺乳類の死活を決する重要性をもつものとなったと論じておられる）と併せて別の機会に考察したい。ボニーのGIMについては、筆者には、暗示イメージの考察視座を与えうるものとして関心があるのである。

広義の音声療法に関して筆者が考察したいのは、上述の理由から、（音声文化芸術面へと昇華されたという意味での）音楽・音響・音声の「内容」であるよりも、身体生理的に反響する、物理次元での質としての、ないし振動としての「音」の癒やす力に関連する事柄である。それは結局、音声の共鳴・共振・身体生理的調和が焦点となる。小論はこれらを参照することによって、ヨハネ「福音書」が発している「共鳴・共振」による「ヴォックスの救済力」を理解するための新しい糸口を得ようとするものである。

## 第一章 ヨハネ「福音書」における音・声について その概要

すでに筆者はヨハネ「福音書」における「フォーネー（音・声）」について、さまざまな機会にさまざまなテキスト箇所に基づいて、「ヴォックスの救済力」というべき分析結果を発表してきている。その概要をかいつまんで述べておく。

まず、「君に声掛けする者ホ・ラローン・メタ・スー」という、人の子イエスの現臨について。

これを紹介する前に術語を整理しておく。その第一は信仰する行為の最高水準としての「永遠の命」（活動）。

17:3 永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを

彼らが知ることで。[注：この「知る」は、彼らとイエスと神とが共鳴的に合一すること 10,14-15.27-30]  
次に「見る」を表意する動詞について。以下では、**見る**と記述した動詞はホラオーであり、**見る**はエイドーである。前者ホラオーは全用例が、信じるという基盤を踏まえて、信じる者が神と御子とをその一致の相において「見る」、というふうに使われている。たとえば

14:9 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。[信じていないのか、信じて] わたしを**見た**者は、父を**見た**のだ。

他方で後者エイドーは逆に、〈イエスをメシアと信じてよいか〉の証拠を自分の目をもって確かめようとして**見る**というふうに使われる（エイドーには他に重要な用法もある）。次の例文で信じると**見る**、**見る**と信じる、この順序の相違を掴んでおいていただきたい。

11:40 イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が**見られる**と、言っておいたではないか」と言われた。

6:30 そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが**見て**あなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。

以上を踏まえて、まず確認しておこう。9章のあの生まれながらに目が不自由だった人は、迫害者たちから追いつてられる苦難の中でイエスから声をかけていただいた（ラレオーしていただいた）。声の主のうちに人の子（だから神）を見て、彼はその場に平伏したのである。

9:37 イエスは言われた。「あなたは、もうその人を**見ている**。ホ・ラローン・メタ・スーがその人だ。」

さてこうしたホ・ラローン・メタ・スーはトマス物語の最後に盛り上がった、身体と身体の演示空間に、天地を揺るがすような響き合い、「こだま」として出現する。ここにはたんなる「調和・和合」の一面があるのではなく、和合を解体する「疑いの憤怒」とのアンビヴァレンスと二重重ねとなっていることによって、奥深い崇高さの響きが発している様を、入念に感じ尽くして欲しい。。

20:25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を**見た**」と言うと、トマスは言った。

「あの方の手に釘の跡を**見て**、この指を釘跡に入れ、

また、この手をそのわき腹に入れるのではないならば、わたしは決して信じない。」

20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を**見なさい**。

また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。

信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

20:28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

20:29 イエスはトマスに言われた。

「わたしを**見た**から信じたのか。**見ない**のに信じる人は、幸いである。」

この場面でのイエスの声（フォーネー、ヴォックス）は、「内容」としては何も語っていない。ただトマスのアンビヴァレントな激情の発語を、「抱いて揺れる母親のリフレイン」のようにして単純にリフレクトしているだけである。しかしここには投影同一化、フェアナイミング、死の欲動やアブジェクション、アンビヴァレンス、スプリッティングにホールディングやミラーリングなど、クライン・クリステヴァ・ウイニコットの注目する

事態が何重にも何重にも折り重なって分析は長大なものとなる（関心のある読者は差し当たりウィニコット著『遊ぶことと現実』第九章を参照されたい）。トマスはイエスのこの声を聞いて、感激のあまり「わたしの神よ」と叫んだのである。イエスのラレオーへの共振・共鳴として発せられたこの感動へ通じる道は、イエスの「声」に耳を澄ますことのみにある、というのが筆者の思いである。詩人矢崎節夫氏は『みすゞコスモス 2』のち「こだます宇宙」JULA 出版局 2001で、金子みすゞの詩「こだまでしょうか」を承けて、平易なことばで「こだま」の本質を歌い上げている。トマスの身体とイエスの身体とが向かい合ったこの輝く演示空間に、破壊衝動・処罰・悔悟と怖れ・赦しの愛・感謝と賛美が交錯し合って、いのちの「こだま」が崇高な響きを破裂させている。筆者は先在のキリストの「受肉」は、この崇高な「こだま、共鳴、共振」の響きにおいて完成したのだと考える（19,30はそのことの確認）。そしてこの完成は、トマスだけでなく原理的には「誰でも」、可能なのである。

以下ではイエスの「声」の他の場面を列挙する。

\*\*\*

この「福音書」では、イエスの音声（フォナー）へ存在次元で〈共鳴・共振〉する者だけが、これを「聞く、アクーオーする者」であるとされている。だから「聞く者」は音声に対し、何よりもまず身体的行為として近づく者を表意しているのであり、こうして「聞く者」が直ちに「聞き従う、アコルーセオーする者」であると語られるとき、それはまさに字義どおりに、「身体行為として声の後に従っていく者」を一次的にはっきりと表意している。しかもそのことがテキスト上に「拡大された類像性」そのもととして記述されている（10,1-5 Vgl. 8,43.47）のである（逆に「聞かない者」においては、無惨にも、音が鳴っても何の共振も起こらないのだ）。

だからイエスの言葉の「内容」についての知性的理解よりも、その「響き」を身体中枢部で受容し、これによって存在丸ごとが身体移動として惹き付けられることこそが遥かに重要であるとみなされている（その一例としてわれわれは上で、「語る」を表意する動詞レゴとラレオーの使用法の相違について瞥見した）。

イエスが「自分の者たち」と呼ばれる者のみがイエスの声を「知っている、オイダしている」のであり、この選びはイエスの、つまりは神の自由の属する。こうして、「聞きうる者」とされていることのなかにすでに、上からの先行する愛が働いているのであり、よって聴取するイエスの「声」には、「聞きうる者」からみて〈懐かしさのマーク〉があり〔父の家からの声として〕、一種〈家郷のなまりを聞く〉という趣がある。しかもイエスは上げられる前にイエスの者たちをその名で呼び寄せられる、と自ら語られた。だから、イエス喪失の悲哀という抑うつ的な身体的激情・パッションのなかで発せられる慟哭は、〔当の本人には潜在的な〕上からの先行する愛、先行する声掛けへの、〔当の本人には自覚されていない〕応答・共振なのである。

上の〈共鳴・共振〉として「聞く者」を産み直す力は、（伝承された）イエスの単純な声の事後的聴取（nachträgliches Vernehmen、メッセージの内容はここに構築される）において発現するか、そうでなければ、眼前に臨在する復活のイエスとしての「君に語り掛けている者、ホ・ラローン・メタ・スー／ホ・ラローン・ソイ」の声として立ち現れるかである。

イエスの声を懐かしさの感慨の内に聴くという、身が震いつくような想起的記憶は、人格丸ごとの再生力をもっている。これをテキスト上で読者自身が体験するように、テキストは次のように仕組まれている。

5章から10章にひとつの長大物語が展開していて、その主題は「次第を追って、人の子イエスと神との一体

性が析出すること」である。5章末尾で「彼(=人の子)の声を聞くだろう」と予告され、その後6,7,8,9章にわたって「声」という語彙は伏せられ続け、やっと10章で「彼の声を聞く」という文言が出現する。読者は後者を耳にしたとき、前者つまり〈遙かな過去となった原初の予告〉を想起する結構となっている。読者が思わず振り返って事新しく、あの「予告の声」を事後的に自分の身体で聴取したのなら、その読みは成功したのである。

以上に概要を述べたような分析結果が内包する事柄としての重大性は、筆者において、近代知のロゴス中心主義を相対化するための意識的な闘いの進展に応じてしか、開示し得ていないし、今後もそうであり続けることだろう。抜きがたい客観主義的意味論、線形的一義性論、知性化的論理主義からは、上の分析結果は主観的恣意的なものとしか受け止められないのだという現実を、筆者は思い知った。

## 第二章 ピュタゴラス的秩序感覚・音楽感覚

音楽療法に関する書物のなかに「ヨハネ福音書の冒頭の『ロゴス』は音のことなのである」という意味の記述をみかけることがある。自らの仕事の意味づけに格好の素材ではあろう。しかし上のようなテーゼはどんな研究に根差しているのであろうか。「ロゴス」を〈ヴェルヴム・ことば〉として理解しようとしても結局〈ラチオ〉の地平へと引きつけて理解されやすいのに、プロローグの「ロゴス」をただちに〈ヴォックス・音〉と解する積義が出現しているとは思えない。

音楽療法畑の著者達がジュリエット・アルヴァン著『音楽療法』(原著 1966, 櫻林 仁・貫 行子共訳 1969 14頁)に依拠しているらしいことは想像できる——因みにアルヴァンは英国音楽療法協会創設者であり、上の訳書(音楽之友社)は日本に音楽療法を紹介した最初の書物であろう——。アルヴァンの論拠は「人間はかつて、音が、世界の始まりに当たって存在し、言葉の形式をとる、大自然の要素であると信じていた」という一般論に基づいて、彼女はエジプト人、ペルシア人、インド人の「音に発する天地創造」説を足早に紹介する。そしてこの古代に発して中世からルネッサンスそして近代にいたる思想の系譜を、〈音とコスモスとの数学的關係〉として括り上げるのである。それがこの著作の第一章第一節「音のコスモスの起源」の論法である。この議論の基盤にあるものを〈音とコスモスについてのピュタゴラス的秩序感覚(音楽感覚)〉と呼ぶことにしよう。西洋人のそれぞれの音楽療法理論を分析するに際して、このピュタゴラス的秩序感覚を縦糸にして、他の要因がどう絡み合っているかを考察していく方法があり得よう。

ところで中村雄二郎氏は『精神のフーガ——音楽の相のもとに』小学館 2000の1~2章で、筆者からみて、氏の近代知批判とはかけ離れた奇妙な議論を展開されている。近代知にとって美と音楽があるなら、パトスの知にとっての美ないし崇高と音楽があろう(氏は後者とニーチェのディオニソスの音楽とを切断させてしまわれるのだろうか)。ディオニソス的音楽の視点からソクラテス(プラトン)に音楽がないことを批判するのはニーチェの「偏見」であると決めつけて、氏はソクラテス(プラトン)に美と音楽があったのだと主張される。そこには氏の『汎リズム論』が強力に作用しているが、数比とリズムを記述する対話篇『ティマイオス』のハルモニア論は、ピュタゴラスの秩序感覚を都市国家の秩序感覚へ転態させたものというべきであろう。後者は近

代知の秩序感覚の根底をなすものであり、この秩序感覚を批判的に抉り出したところに偉大な構造主義者達の受難のもとがあったことを氏は指摘されていたのではないのか（プラトンを一色にみてしまえないとしても）。

筆者は氏の『かたちのオディッセイ』岩波書店 2000から多くの刺激を受けている（後述）。今はその第七章「美と力と崇高のはざま」に言及する。この章で氏は「ギリシア的な価値として美を高く評価していたハイデggerがナチズムに巻き込まれたのは、ヘブライ主義に発するもう一つの価値、つまり崇高への感覚を欠いていたのではないか、という批判があった」と述べられている。この文言を目にした瞬間、筆者は1940年のブルトマンの発言を思い出したのである。「わたしたちは、心の奥底において、つねにギリシア人なのである」、「都市国家のなかにその故郷を持つ人間は、同時に、世界の神的な秩序に組み入れられていることを自覚する」（『新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解』1940 山岡・小野訳）という議論がそれである。この観点から彼は、現代人の思惟様式（「新聞、ラジオ、学校」で通用するそれと彼は注記した、ナチスの体制のもとで！）を基準にして過去のそれを解体する「非神話化論」を提起したのだ。

中村雄二郎氏の「汎リズム論」と「コスモロジー」とを重ねて学ぼうとするとき、歴史の契機をどう考えるべきなのだろうか。リズムと宗教という観点からは、エリアーデの『永遠回帰の神話（祖型と反復）』に取り組み方向がありえよう。ここにリズム論を聞き取るなら「コスモロジー」は、エリアーデ自身の明言どおり、ピュタゴラス、ソクラテスの秩序感覚とその音楽以前に帰ることとなる。

いずれにせよ、（芸術療法と区別した次元で）音とリズムと調和との癒やしの力を問題にすると、ピュタゴラス的秩序感覚が相対化された地平に立たなければならないことだけははっきりしたと思われる。

### 第三章 ゲイナーメソッド

ミッチェル・ゲイナーが上記著作を刊行したとき、彼は「ストラングがん予防センター」腫瘍科および統合医療科の科長（テキサス大学サウスウエスタン医学学校出身）で現代医学の現状に疑問をもちつつ任務を遂行する一方、ホリスティック医学を「なんら恥じることなく唱道して」いたのである。彼が提唱するメソッドの構成要素を下に記載しておこう。

1) 腹式呼吸 2) マントラ詠唱 3) 誘導イメージ／瞑想 4) シンキングボウルの使用 5) 肯定命題復唱 6) 適宜「トーン」ないし「絶叫療法」を使用、というふう多彩なものを併用する技法である。ここに「マントラ」とは、タントラの教えによれば、「沈黙の黙想のちゆうで唱えられ、意識の集中と思考の停止に役立つ、聖なる母音を柱にした基本音」であり、真言密教で「真言」と訳されている。「種子マントラ」には、よく知られているマントラ「オーム」「ウラーム」などを含めた七つのマントラがあり、それぞれが別々のチャクラ（からだの個々のエネルギーセンター）と調和し共鳴するといわれている（他方マントラのような単音節の基本音から宇宙は展開してきたとされている）。ゲイナーはこれらの聖なる母音を少数組み合わせで「自分自身のエッセンスに適合しこれと共鳴する、一人ひとりの〈ライフソング〉を創り、瞑想における自己探求と心身調律に役立つよう」すすめている。彼は技法形成の最初期、修道僧の極度の疲弊についてトマティスが行った有名な治療（それは「グレゴリオ聖歌」が持っている奥

深い治癒力を基盤にして初めて、激務の修道院内の健康が保たれていたのだということを鮮明に証明した)に倣い、この聖歌の詠唱を考へもしたことがあるが、習得困難なので断念したという。〈ライフソング〉の提唱はその断念した思いがこめられている。なお、ひとつの母音を30秒程度伸ばして唱えるマントラ詠唱はたちまち10分、20分と経過してしまう。シンギングボウルとは仏教寺院の本堂で読経の際鳴らすような打ち鐘であり、ひとつでも複数でも大小さまざまなものを適宜使用する。「無限の愛、無限の調和、無限の平安」などの「肯定命題」を瞑想の始まりと終わりに復唱することが(この実修項目は、彼の言明が伝えるように、日本の五井昌夫—西園寺昌美師弟の思想を高く評価していることの現れである)、このメソッド全体を統一する枠組みとなっている。

筆者は毎朝、歩行気功と歩行内観法に組み合わせてこのメソッドを実修している(シンギングボウルは車運転時の、呼吸法主体の実修の際にテープで代用する)。

上にゲイナーメソッドの技法の一部を具体的に記述したが、それは筆者が読者に、ゲイナーの治療思想・健康思想を技法実修の身体感覚から体感的に掴んで欲しいからである。読者はぜひからだの感覚(自分の呼吸と脈拍との健全なリズム感覚)にふれるようにしながら、ゲイナーの次の記述を読んでもらいたい。

病気は体内の不調和のあらわれ、細胞または特定の器官、たとえば心臓や肺におけるバランス失調のあらわれである。とすれば、共鳴という特性をもっているシンギングボウルは、それを奏で、それに耳をかたむける人に「宇宙交響曲」へのアクセスをうながすだけでなく、その人のからだどこかに調和を回復させる作用があるとかんがえられる。

詠唱が脳波を深いリラクゼーション状態にみちびくという、わたしの個人的および臨床的経験は、多くの研究によっても裏づけられている。わたしだけでなく、多くのヒーラーが、治癒はからだの調和が失われた部分——したがって病んだ部分——に正常な周波数の振動を回復させることによって達成できると信じている。音が振動であり、その振動がからだの内外を微細に震わせている以上、その音は耳を介してだけではなく、全身の細胞をつうじて「きこえている」とかんがえられなければならない。シンギングボウルに同調する声のひびきもまた、その人の存在全体に浸透している。脈はゆったりと打ち、呼吸は正常なリズムをたもっている。そのとき人は、静穏な、瞑想的なまなざしで自己のいのちをみつめることができる一種の変性意識に入っているのである。

呼吸への注視は(「出息入息についての気づきの教え」という最初期釈迦説法の瞑想技法を継承する)ヴィパッサナー瞑想に合致していることに注目しよう。なお最後の一文は、ルソーがボートを浮かべたりして体験したことを報告している内容(『孤独な散歩者の夢想』『第五の散歩』)と同じである。

実はゲイナーのこの著作には、「音はなぜ癒やすのか」についての諸研究、諸技法の情報が極めて濃密に紹介されている。筆者はその一つひとつに感動と興奮をもって惹き付けられ続けて、再読に再読を重ねたものである。その後中村雄二郎氏の『かたちのオディッセイ』に出会い、氏がかたちの形成にとってリズムの持つ力に注目され初めて、やがて「汎リズム論」を提唱されるにいたる、まことに刺激的な道筋を追体験する際に、筆者はゲ



イナーの記述に接したときのような感動と興奮を再び味わったのである。上の引用文中「宇宙交響曲」とは、中村氏がしばしば話題にされる天体の発するパルサー音の交響（ピュタゴラスやプトレマイオスやケプラーの語った「天球の音楽」）などよりも、むしろ〈タントラが教える、マントラの基本音の展開で構成された宇宙〉を指していよう。中村氏も下記高野山講演でこれについて、「たいへん納得的でしかも魅力的な考え方」であると共感しつつ言及されている。ゲイナーの著書にはパルサー音の交響も、イエンニの「波動学」、非線形の振動の「引き込み」、「同調」も語られている。この二つの書物を平行して読みたい。

#### 第四章 共鳴・共振論と宗教

中村雄二郎氏の「生命リズムと共振」（所収：『岩波講座 宗教と科学 第一〇巻』1995）に注目しよう〔論じ方が類似している論文「六大にみな響あり——宇宙リズムと形態形成」1987（所収：『かたちのオディッセイ』）、講演「現代思想と密教」（所収：『密教体系第一二巻 密教と文化』法蔵観 1995）をも参照する〕。

氏は一章、二章で共鳴・共振論の探求はあくまで「経験的・人間論的に考える」枠組みの内部で行われるべきだと強調した後、その探求の到達点として、「出会った三つの根源的リズム」を概説される（三章）。胎児の羊水呼吸は太古の海の魚の鰓呼吸と無関係でなく、人間が感じる生命のリズムは太古以来の海水のリズムを基礎にしていること。宇宙は沈黙しているのではなく、電波望遠鏡が捉えた天体のパルサーの交響はまさに「天球の音楽」であること。胎児の聴く母親の胎内音はあの「天球の音楽」と酷似していること。こうした「経験的・人間論的」探求から一転して四章では「生命リズムは宗教とどうかかわるか」というタイトルの下で、真言密教にかかわる、空海の〈五大にみな響きあり〉の句、ヤントラ、声明の三点がリズムという観点から考察される。この章は真言密教を窓口にして「宗教的思惟」と「経験的・人間論的考え」との対話を展開していることになる。そのためには経験科学的・人間論的に見えてそうではなく、むしろ宗教もどきである思惟形態を排除しておく作業（一章）が必要だったのである。

中村氏のこのようなまことに手堅い議論手続きに筆者が感謝したいのは、「経験的・人間論的な考え」によって掘り下げられた「リズム・振動」論を語る言語が、聖なるものの領域で、既成の教学・宗教学、哲学の用語を使用するよりも真実に迫る議論を遂行できる場面のありうることが示された、という点である。

じつは筆者は、ヨハネ「福音書」に〈共鳴・共振〉を見出してしばらく後に、G・タイセンの『批判的信仰の論拠——宗教批判に絶え得るものは何か——』（岩波現代選書 1983 原著 1978）に出会った。ここでは聖なるものの体験が〈振動と共鳴〉として論じてあり、筆者には大きな勇気を与えるものであった。彼は〈信仰の内容、聖なるものは「経験で捉えられるようなものではない」と超然としているわけにはいかない〉と論じて中村氏と同様、「経験的にとらえる意識」に向かう。このような方法態度から彼が探し当てたものが「共鳴関係」という概念であり、ここから吸収すべきものは多い。しかしタイセンの議論は経験に十分根差すことなく（現象学的な）思弁に流れているし、他方でヨハネ「福音書」に立ち現れている「共鳴関係」は身体論・無意識論・象徴化論の次元のものである。いまやわれわれが開拓していかなければならないのは、人格どうしの共鳴関係、（終末論というより）始元への共鳴関係の問題である。ヨハネ「福音書」はイスラエルの根底にある出来事への共鳴を幾重にも響かせている（例：拙論「ヨハネ『福音書』の竜骨をなす黙示的諸表象の連鎖および第三セ

キャリア)。

## 第五章 並木浩一〈相互テキスト性論〉の共鳴感覚に学ぶ

〈イスラエルの歴史を完成した真理なる神〉との遭遇という直接体験——『ヒューレーカメン(われら見出したり), エルコン・カイ・イデ(来たり給え, みそなわし給え), ヘオーラカメン(われら見たり)』はその術語である——においてヨハネ共同体は形成された。自らに訪れた直接体験の包括的真實性を世に「反復」することを意図して、この共同体が産出したエクリチュールがヨハネ「福音書」である。そしてそれはエクリチュールでなければならなかった。そこに刻み込まれた象徴言語の配置のなかに、[フルトマンの反ユダヤ主義は否認するが: 拙論「フルトマンはどこへ向けて『聞く』のか」参照]時間と空間を超えてイスラエルの神的出来事が何重にも反響しているのである——親密な楽団の多重演奏の中へフルートのソロが〈聞きつつ唄いながら〉即興的に入っていく様(このソロには多重演奏の全体が反響する)！。

このようなイメージを思い描かせるのは並木浩一氏の〈相互テキスト性論〉である(「ヨブ記における相互テキスト性——2章4節および42章6節の理解を目指して——」所収: 大野恵正他編『果てなき探求 旧約聖書の深みへ——左近淑記念論文集』教文館 2002)。そこでは〈読みつつ自己主張しながら〉書き込んでいくイスラエルエクリチュール主体の特性が衝撃的に語り出されている。エクリチュールの創造主体たちの「思想」が多重的対話(隔絶しているかにみえる主体相互の驚くべき共鳴共振)を交響させるのである。氏はクリステヴァの相互テキスト性論での貢献を四点にまとめ、その第四点として創作主体の「思想の働き」の重視を挙げられている。ここに「思想の働き」と呼ばれた術語は、氏の論文「アモスのイメージ」において、預言が指示する「思想、ないし思考の場(喚情的機能の目立つ預言においては連想の場)」として提示されていた概念系が展開されたものである(認知言語学で時枝誠記言語過程説が再評価されてきているが、時枝の「主体の概念作用」と——構造言語学の帰趨を見据えられた——並木氏の「思想の働き」は共鳴する。筆者はこれの無意識面をフロイトの「夢思想」を意識しつつ「テキスト思想」と呼ぶことにする)。

ヨブ記終結句に対する並木氏の「相互テキスト的な読みの実行」で、作者の「思想の働き」がもっとも強力に読み取られているのは、氏がヨブ記 30, 19の「塵灰言辞」と創世記 18, 27のそれとの間の強力な共鳴関係を指摘されている場面である。氏はヨブ記の「塵灰言辞」の記述は、「作者の思想表明のための相互テキスト的引用」なのである、とすら語られている。〈神についての直接体験〉をめぐる「テキスト思想」相互の共鳴関係へのこの嗅覚こそ、筆者が身につけたいと願うものである。

筆者は、ヨハネ「福音書」がイスラエルへの深く切ない愛に発したエクリチュールであることを、そこでのイスラエル諸思想の強力な反響(生命再創造)を重大な証拠として主張したいからである。